

日本学術会議会長メッセージ

「致 知 格 物」

日本学術会議第17期会長 吉 川 弘 之

儒学の教義を表す歴史的な文献としての『大学』に「致知格物」という言葉があり、私たちが引用することも多いようです。これは、知を致すは物を格（ただ）すにあり、と読まれ、知を極める方法は、ものごとを正しく受けとることにある、と言っているのであって、これは現代の、しかも日々の生活においても、貴重な内容を持っていると思われます。この言葉だけを取り出して考えても、誠に味わい深い意味を持っており、私のように、人間の思考過程に関わる研究を行っている者にとって、基本的な原則を、極めて簡潔に表現している言葉として、感心するばかりです。

ところで、この言葉は、物ごとの論理的構造を説く一文の中にあります。ここでは、その厳密な解釈は専門の方に任せるしかないとして、天下を治めるという大事業を行う者は、正しい知を身につけていなければならないことを結論する論理を述べていると解釈しておきます。その脈絡は、徳を世に示した人は、その前にその国を平和に治めた、しかしその前に平穏な家庭を築いた、そしてその前提として、自分自身を善良なものとした、その前提として心を正しくした、その前提は誠実な意図を持つこと、その前提は知を極めること、そして最も基本的なものがものごとを正しく受けとめること、となっていて、最後に致知格物が出て来るわけです。

人間の基本的な感受性が、社会的な徳およびその実践としての政治にどのように反映するか、という現代でも恐らく最大の問題であり、あるいはその実現は壮大なプログラムであると考えられる課題を説明する文脈の中に、家庭が出て来るのを見て、私は我が意を得た思いがしました。国を治める、というような、一般の私達からは遠い行為と、一方では知を極めるというような、今で言えば哲学者の営為であって、必ずしも私達にとって身近ではない事柄との間の関係を、論理的構造を使って説明する文章の中に、家庭という、すべての人が経験し、しかも最も日常的な場が登場することが、私にとって、一つの驚きであったのです。

工学者としての私は、いま扱っている研究課題は抽象的なものですが、常に現実との関係に立ち返って考

えることを習慣にしています。その現実とは、最も身近で普通のものでなければならない、というのが原則です。そのことが、この『大学』の中に、見事に示されていたのは、大きな感銘でした。

日本家政学会が、その目的として「家庭生活を中心とした人間生活における人と環境との相互作用について人的・物的両面から自然・社会・人文の諸科学を基盤として研究し、生活の向上とともに人類の福祉に貢献する」と定めているのは、誠に素晴らしいことです。恐らく、この短い表現の中に、大切な内容は十分に込められているのでしょう。しかし敢えて、『大学』で受けた感銘の延長として、このことを私流に考えると、次のようなことになります。

家庭を学術研究の対象とすると言うことは、多くの学術分野が作る学問体系の、一つの切口を学問領域として設定することであり、従って一方で現実的な家庭の向上を使命としながら、一方で多くの学問領域において提出される諸仮説を実証する場を提供している、と言うことです。別の言い方をすれば、様々な学術領域、すなわち物理学や生命科学、法学や経済学、工学、農学、医学などの進歩や変化が、直接にあるいは間接に、その効果を家庭に顕わすことを知るとき、その効果は様々な学術領域が進む方向の正当性を判断する貴重な材料を提供するものであり、多くの学術領域の進歩や変化が、どのような道筋を通して家庭に効果を顕わしたのかを知ることが、学問の構造と、それに対応する社会の構造とがはらむ問題を顕在化させることなのであって、そのことをする主体を欠くという、現代の深刻な問題を解決する可能性を、そこに見出すことすらできる、と思えるのです。

日本家政学会が50周年を迎えることは、まことに目出度いことであり、その間の関係者の方々の御努力に心から敬意を表したいと思います。しかし、それ以上に、家政学という、総合的な視点を持つことによってその意義がますます大きくなることが予見される学問領域を、会員の皆様が更に発展させ、学術における21世紀の一人の主役として活躍することを、心から期待するものです。